【翻　訳】

極東捕虜日記
ダン・ブラウン（Dan Brown）の日記（1941-1945）より

捕虜収容所長 江本茂夫中佐（1888-1966）

Camp Commandant Lt. Col. Shigeo Emoto（1888-1966）

ナイジェル・ブラウン
Nigel Brown
川　口　好　孝　訳

訳者解説

はじめに

ここに訳出したのは表題の示すとおり、第二次世界大戦中、戦局が悪化するなかで、捕虜に対する人道的扱いを貫くという困難な任務を遂行し続けた江本茂夫中佐に関するナイジェル・ブラウン氏（Mr. Nigel Brown）による2013年執筆の記事（〈http://www.nigelbrown.me.uk/pow-emoto.htm〉2017年１月閲覧）の全文である。

１．横浜専門学校と江本茂夫中佐

江本中佐は本学の前身である横浜専門学校で1936年４月から1941年７月までにわたって教鞭を執られた方であり、私たちにとっては当時の英語担当の重鎮であり、陸軍随一の英語の使い手、英語の名スピーカーの誉れ高く、マシンガン・イングリッシュの異名をとる卓抜した英語力と熱心な指導で定評のある英語教育者として近しい存在である。なによりも実用英語の習得に重点を置いた横浜専門学校の英語教育を支え、その名を高からしめた功労者であり、本学の歴史を語るうえでその名を逸することのできない人物である。江本中佐が心血を注いだ授業はダイレクト・メソッドと言われる英語による受け答え中心の厳しい指導内容の授業であるにもかかわらず、学生たちは江本中佐のことを慕って、受講を切望し、英語力の向上

を目指して、通常の授業以外にも課外授業や春夏冬季休暇中の特訓の実施を願い出たと言われる。本学経営学部で教授を努められた田久保浩平氏は、夏季特訓の開講を待ちわびる心情を学生時代に次のように吐露している。

「夏は吾等の希望の華であり生命の泉である。横浜専門学校入校以来４ヶ月江本教授の下にて徹底的の人格訓練を受け新たないきぶ〔ママ〕きを感じた新入生は遠い懐しい故郷の夢も断乎しりぞけて夏季訓練を一日千秋の思いで待ち焦れるのである。」（田久保浩平編『恩師江本茂夫先生』私家版、1943年、81-82頁）

江本教授
（近藤喜一氏寄贈・神奈川大学資料編纂室所蔵　昭和16年12月横浜専門学校貿易科卒業アルバムより）

２．ナイジェル・ブラウン氏と父の日記

筆者のナイジェル・ブラウン氏にとっては江本中佐は父のダニエル・ラルフ・ブラウン氏（Mr. Daniel Ralph Brown 1922-1990）が収監された函館俘虜収容所の所長であった人物であり、記事の内容も所長としての江本中佐を中心に展開されている。

筆者は1950年にイングランド中部のブラックカントリーと呼ばれる地域に所在するクレードリー（Cradley）に生まれ、由緒ある歴史的建造物であるモリニュー・ホテル（Molineux Hotel）の保存・再生プロジェクトを主導し、当初解体予定にあったこの文化財指定建造物を市のアーカイブズ（記録資料）保存施設として蘇らせるきっかけをつくるなど、母国のイギリスで王立都市計画家協会（Royal Town Planning Institute）の認定資格

を有するタウンプランナーとして数多くの事業に携わってきた経歴の持ち主であり、その活動は広く海外にまで及んでいる。コンサルタントとして独立後の６年間を除く30年間、地方自治体を母体に要職を歴任し、その要路にあってバークシャーやハンプシャー、ウェストミッドランドの諸州を中心に都市計画の立案や都市の再開発事業等を通じて、同氏は社会資本の充実と環境の整備に努めるとともに、専門分野のテーマを中心に各種の講演を精力的にこなしている。2016年に第一線を退いた後も、かねてから所属しているウェストミッドランド州歴史的建造物トラスト（West Midlands Historic Building Trust）およびウスターシャー州建造物保存トラスト（Worcestershire Building Preservation Trust）の評議員兼理事に名を連ね、自ら関心を寄せる歴史的建造物を活用したまちづくりに力を尽くしている。こうした専門的職務に従事し、また理事としての務めを果たすかたわら、彼は郷土と自らの家系の歴史についても調査を重ねており、その成果を自ら開設したウェブサイトのなかで紹介している。父の極東捕虜日記もまたこのサイト上で公開されている。

この日記を読むと、1943年の３月を境にそれ以降、とくに５月までの期間にかけて捕虜に対する所内の待遇の改善を示唆するような記述が梅雨の晴れ間のように散見されるようになる。筆者はこうした父の日記にあらわれた枉屈（おうくつ）の心事の変化を察して、それが捕虜に対する当時の日本軍の方針の転換を意味するものであり、具体的には捕虜に対する人道的扱いを徹底させた江本中佐の所長就任の結果もたらされたものであると推測している。しかし実際には、江本中佐の所長就任は１年後の1944年の３月であり、このタイムラグはさきの日記が網羅する３ヶ月間が江本中佐の在任期間に該当しないことを示している。

Ｄ・ブラウン氏は1942年３月にジャワで捕虜となり、同年12月に函館俘虜収容所に収容されている。この間の、病死者が続出し、そのことから捕虜たちが恐れおののき、地獄船（ヘルシップ）の名で呼んだ輸送船や列車による移送期間を含め、その抑留生活は３年半の長きに及んでいる。残念ながらＮ・ブラウン氏の手許に残されている日記はそのすべてではなく、祖国を離れてから帰還するまでの４年間のうち、軍用輸送船として徴用されたアンデス号に乗船し、リヴァプールを出航するために近在のウェストカービーのキャンプを出発した1941年12月４日から1943年12月28日までの間に書かれた分と、終戦後、本国に戻るまでの間に書かれた1945年９月１

日から同年11月20日までの分であり、この２つの期間に挟まれた真ん中の部分の日記は失われている。

その理由は定かではないが、このことについて筆者のＮ・ブラウン氏は生前の父との会話の記憶を手掛かりに失われた日記が極東国際軍事裁判で証拠資料として使われた可能性を指摘している。したがって、現存する日記から私たちは江本所長時代の函館俘虜収容所の様子を直接知ることはできないわけであり、この点、望蜀の嘆を禁じ得ないが、国際世論を考慮して道理に従い、あるいは必要に迫られてやむなく捕虜に対する待遇の改善が以前から模索され始めていたことは確かであり、この方針に沿って行われた江本中佐の所長就任を転機に状況が大いに改善されたであろうことは想像に難くない。そしてこのことはまた捕虜の証言をもとに作成された内外の文献や資料によって各方面から立証されている。

３．ナイジェル・ブラウン氏の記事の特色

Ｎ・ブラウン氏の記事もまたこうした江本中佐の良心的立場を支持する一連の記述の流れを汲むものであり、同じ系譜に属するものである。ただし、今回訳出を試みた記事は、捕虜としての体験を持つ当事者の直近の身内によって書かれた記事である点で、これまで公にされてきた多くの資料と大きく異なっている。しかも、利用可能な英文資料を駆使して、所長として江本中佐が果たした役割を正確に位置づけ、その人となりと業績について努めて公平に伝えている点で、第三者から見ても好感の持てる、一読に値する記事となっている。このほかにも、筆者の当を得た引用から、各論者のコメントをもとに江本中佐の全体像を的確に把握することができるばかりでなく、その風丰躍如（ふうぼうやくじょ）たる引用文の記述や生き生きした描写を通じて、私たちは「すぐれた武人・無二の教育家」としてどんな些細なこともゆるがせにすることなく、何事に対しても常に全力を尽くし、真摯な態度で事に当たった往年の江本中佐の面影と人柄を偲ぶことができる。

次に、Ｎ・ブラウン氏の記事のなかに示された江本中佐の所長就任の時期をめぐる錯誤についてどう考えるかについてであるが、江本中佐の実像に迫ろうとする筆者の意図は、父の日記を拠り所としながらも、その欠落部分を補うべく完璧を期して、他の客観的データを参考に執筆されたこの記事によって十分に果たされており、したがって、その成果は一点の錯誤を含んではいても大筋において正しく、内容的に信頼できるものであり、

誤りを償って余りある記事の内容を重視するならば、かかる錯誤は過去の歴史的事実を扱う際につきものの困難を示すものであっても、記事そのものの価値を損なうものでないことは明らかである。このように考え、江本中佐について理解するための一助となることを願って、この記事を訳出した次第である。

ところで、この記事を一読すれば明らかなように、筆者の江本中佐に対する好意的な態度は、同時に日本軍による捕虜の人権を無視した不当な対応に対する批判の裏返しの表現でもあり、その根底に軍部に対する根強い不信と不満を含んでいる。このことを理解するならば、われわれは明暗の明の側面に目を向けるあまり、暗の部分には注意を向けず、物事の一面しか見ずに、結びの部分で鮮明にされるこの記事に込められている筆者の重要な抗議の意図を見落としてはならないであろう。この記事は江本中佐について語りながら、たんなる一人物に対する賛美に終わることなく、全体を俯瞰し、戦争という極限状況下における暗部を摘出することによって、個人の力を無力化する戦争という災厄が強いる不条理と犠牲について考えさせる重みを持っている。

ただし、悪弊に染まった組織の闇を改革せんとする、当時冷遇され続けた江本中佐の革新的行動は蟷螂の斧だったわけではない。その孤独な営為が及ぼした影響の大きさと誰もが成し得なかった困難で重要な任務を成し遂げたことの意義については、いまでは誰もが認めるところである。「荒野(あらの)で叫ぶ者」（困難な状況のもとで真理を語り続ける人）の声であった江本中佐の主張は、その後、不当な非難を受けることなく、正論として多くの人の心を捉えるにいたっている。

戦時下における江本中佐の勇気ある行動が共感をもって読まれるとともに、この拙い邦訳が語学に堪能で国際情勢に明るい江本中佐が全力を傾けて貫き通した、敵味方の別なく、彼我の違いを越えたところに成り立つグローバルな人道主義と、ともすれば忘れられがちな、戦争のもたらす栄光とは正反対の悲惨な側面についてあらためて考える機会となれば幸いである。

おわりに

文中に施された筆者による用語や人名等の解説についてはアラビア数字で通し番号をつけ、（1）（2）……というように表示し、原注として本文に続く出典の後にまとめて訳出した。

訳注は〔　〕で番号を囲んで示した。

記事のなかに頻出するPOW（Prisoner of War）に対応する訳語としては、引用や固有名詞などの場合を除き、「俘虜」という用語の使用は控え、現代語として常用される「捕虜」という用語を用いることとした。

なお、本文に掲載されている図版は紙面の都合で割愛し、江本中佐の写真とナイジェル・ブラウン氏の函館訪問時の写真を新たに掲載した。

最後に、江本中佐に関する記事を翻訳し、紀要に掲載することをご快諾くださったナイジェル・ブラウン氏にこの場をお借りして厚く御礼申し上げる。同氏はまた彼のウェブサイトの読者から寄せられた江本中佐に関する有益な情報を快く提供してくださった。イギリス陸軍衛生部隊所属の、当時少佐であったフランシス・J・マレー氏（Mr. Francis J. Murray）は、八雲分遣所および室蘭、西芦別等の分所で捕虜軍医将校として抑留生活を送ることを余儀なくされたが、彼は妻と息子に江本中佐のおかげで非常に多くの人命が救われたと語っている。ちなみに、同氏は抑留中の1944年11月に江本中佐と実際に会っている。これはマレー氏のご子息からN・ブラウン氏のもとに最近寄せられた情報である*。この情報は、巡回時に接見の機会を得た時期について具体的に触れている点で、特筆に値する。

N・ブラウン氏のご好意に感謝するとともに、このことを付記して拙文を終えることにしたい。

＊F・J・マレー少佐（故人）の子息であるカール・マレー氏はまた「父が江本中佐に大変世話になったようだ。ぜひお礼を言いたいので、遺族の住所を知りたい」という内容のメールを、捕虜問題に詳しく、元捕虜との間で和解交流を推進しておられる笹本妙子氏に送っている。このことについては、白戸仁康氏の著作のなかで言及されている。同氏は両者の邂逅について当時の状況から類推して「マレー軍医少佐が最初に江本と会うのは、室蘭時代以外にはない。」と述べておられる（白戸仁康『北海道の捕虜収容所―もう一つの戦争責任』北海道新聞社、2008年、130頁）。ちなみに、室蘭のキャンプが閉鎖され、芦別に移転するのは1945年６月７日のことである。

なお、終戦直後の８月24日、演説を終えての会食後に、江本中佐はマレー少佐から一通の手紙を預かっている。収容先を芦別の第１分所からさらに赤平の第２分所に移したマレー少佐は、芦別に残してきた英軍捕虜のことをいたく気に掛けており、旧知の仲である米国人軍医に宛ててしたためた後事を託する手紙の受け渡しを誠意ある対応を常に心掛けている江本中佐に依頼したのだった。互いに面識のある、ともに信義に厚い両人の間で交わされたこの紳士的で、フレンドリーなやりとりについては、白戸仁康氏前掲書、232－233頁参照。

参考文献

訳出にあたっては、江本中佐について書かれた文献のなかから、とくに次に掲げる論著を参考にした。

吉村和嘉『かかる師ありき 恩師・江本茂夫傳』私家版、2008年
田久保浩平編『恩師江本茂夫先生』私家版、1943年（本書の出版年については吉村和嘉氏前掲書に従った）
白戸仁康『北海道の捕虜収容所―もう一つの戦争責任』北海道新聞社、2008年
笹本妙子『連合軍捕虜の墓碑銘』草の根出版会、2004年
江利川春雄『英語と日本軍―知られざる外国語教育史』NHK出版、2016年
出来成訓「横浜専門学校の英語教育」『日本英語教育史研究』第６号、1991年
河野通「語学将校 陸軍中佐 江本茂夫―軍人として教師として」『東京家政大学研究紀要 人文社会科学』第33集、1993年
北条良平「オズワルド・ワインド氏の『ニッポン』―２つの国籍に生きた作家の明治・大正・昭和」PHP 研究所『歴史街道』1990年９月号～1991年３月号

翻訳

函館俘虜収容所の初代所長を務めたのは畠山利雄大佐であった。江本茂夫中佐は２代目の所長にあたる。３代目の所長は細井篤郎大佐である。

陸軍士官学校出身の江本茂夫は戦前は日本軍の軍務に服した。東京外国語学校で優秀な成績を修めた[1]彼は、その功を認められて、卒業後まもなく香港で英語について学ぶ適任者に選ばれ、そして陸軍の将校に英語を教える教官になった。

その後、江本は横浜専門学校の英語主任教授になった。リチャード・C・スミス編『外国語としての英語教授法1936-1961：英語教授法の基礎』第５巻（'Teaching English as a Foreign Language, 1936-1961：Foundations of ELT', Volume 5, edited by Richard C. Smith）のなかで著者は、選りすぐったなかから江本の教授法を取り上げて次のように絶賛している。「ところで、中等学校における誤った教育によって負わされることになる著しいハンディキャップにもかかわらず、それでもなお教師はオーラル・ワークの分野で上級レベルを対象にしてさえすぐれた成果をあげることが可能である。私は、その手腕により英語の学科主任を務める専門学校で驚嘆すべきすばらしい成果をあげた日本人の元大佐、江本茂夫（a former Japanese colonel, Shigeo Emoto）を知っている。」[2]

江本は1941年に応召され、軍務に復帰した。最初は鉄道輸送部に勤務したが、1943[ママ]年に函館俘虜収容所長に任命された。この異動は、捕虜の待遇の改善を目的に浜田少将[3]によって行われた人事の結果であった。

捕虜収容所長としての14ヶ月の短い在職期間中に、彼は部下たちに捕虜が身につけているさまざまな慣習について直接教え込んだ。ところが、俘虜情報局長の田村少将[4]によって浜田がタイに派遣され、局長の任を解かれると、捕虜たちの生活はじきにもとの劣悪な状態に戻ってしまった。江本は函館の地を去ることになるのだが、彼が日本の首脳部によって広く支持されていたのとは異なる方法で、捕虜に接し、適切な対応をとったため、そのことが理由で更迭されたことは明らかである。

日記のなかで私の父は大日本帝国の陸軍将校や看守の名前をあげていない。だから、彼は命によって収容所長を引き継いだ江本のことやこれを契機にそれまでと違った体制になったことには言及していない。しかし、彼は1943年の３月から５月にかけてのページで事態が改善されたことに確かに触れている。靴下やブーツ、家に便りを書くための郵便はがきの配給、ジャワを出発してから死亡した27人の仲間たちに対する追悼式、さらに（ふだん看守によって横領されていた）赤十字社から小包で届けられる救援物資の配給が行われたことは、所内の待遇の改善を如実に示すものであったし、また、赤十字社とは別ルートで収容所の農場に到着した４頭の豚は食糧事情を明らかに改善することになった。彼はまた、医療面でも改善がなされたことについて次のように述べている。「病人は最終的に広々とした風通しのよい部屋を与えられたが、このことは病気の回復を大いに早めることになった。」

さらにまた彼は、1943年４月18日に書かれた日記のなかで次のように言っている。「その日の夕刻には所長の許可を得て、すばらしい一日を締めくくる音楽会が開催された。上海を離れて以来久しく口にしたことのない満足のゆくすばらしい食事も振舞われ、日本に来てから間違いなく一番楽しい日だった。」

そんなわけで、江本はほぼすべてにわたって周囲の環境をすっかり変えたのだった。

「旧軍における捕虜の取扱い―太平洋戦争の状況を中心に―」と題する研究論文のなかで立川京一は江本茂夫に言及している。立川は東京にある防衛省防衛研究所戦史研究センターの戦史研究室長である。彼は太平洋戦争期間中に日本帝国の陸海軍によって捕虜に対してなされた非人道的な扱いの実例と、それが何に基づくものなのか、その原因について調査している。

結論として、彼は次のように述べている。「確かに、捕虜収容所長の中には、私的制裁の禁止を徹底しようと努力した者はいる。例えば、函館俘虜収容所本所の第２代所長・江本茂夫は、「捕虜を集めて欧米と日本との

習慣や、しぐさの違いを教え、看守から誤解を受けることがないように何度も説明した。……分所を巡回する度に、同じように説明し、所員を集めて『どんなことがあっても捕虜を殴ってはいけない』と訓示した。」江本の努力はかなり報われたようであるが、このように比較的成功したケースは珍しい。」〔5〕

ピーター・V・ルッソ博士（Dr. Peter V. Russo）(1) 執筆のオーストラリアの新聞記事は、江本大佐（Colonel Emoto）が連合国軍最高司令官(SCAP)(2) から「捕虜収容所長の鑑」として激賞されたことを報じている。〔6〕

戦前の東京時代の江本を知るルッソ博士は、彼のことを「外国人と親しく交わり、幅広い交流を重ねたシゲ・エモトと呼ばれる小柄でキビキビした動作の日本人大佐」と評しており、「きっちりと短く刈り込んだ頭、厳格な軍人らしい態度、軍服の胸のリボンやサムライ刀」といった特徴的な佇まいと出で立ちの人物であったために、彼のことを忘れずにおぼえていた。

ルッソはまた彼が日本の武士道の美徳と、さらにこの美徳について外国人がなぜもっと学ばなければならないのか、その理由について相手を教え諭すように懇々と説いて聞かせる傾向があったことに触れている。〔7〕

この「小柄でキビキビした動作の大佐」こそは、だれあろう1934年に『戦闘綱要』（“Battle Principles”）という表題の戦に関する教範を日本語の原文から英語に翻訳した江本茂夫その人なのであった。

江本が函館で所長の任務を引き受けたとき、この収容所は日本人の間でさえ、悪名高い地獄のように恐ろしいところとみなされていた。江本がまず着手したのは、収容所のあちこちに看守に捕虜を殴打したり、虐待することを禁ずる旨の掲示を出すことだった。次いで衛生設備を改善するために、下水道の設置に取り掛かった。この結果、函館は保健衛生と医療の両面で近代的な設備を備えた日本で唯一の施設となった。

江本が所長の任にあったときに、死亡した被抑留者は丁重に軍葬に付され、誰もが仕事を免除されて、葬儀に参列した。赤十字社からの小包は到着後直ちに配付されて、横領しようとした看守は厳しく罰せられた。所長は捕虜たちに苦情があれば直接自分のところに申し出るよう勧めた。彼はぎこちない態度で来訪者にお茶を出し、煙草を勧めた。厳格な軍人らしい物腰は保っていたけれども、彼は苦情に対していつも同情心に満ちた思いやりを示した。

以上述べたことがどれもあまりにできすぎた話であり、にわかには信じられないと言うのであれば、ルッソ博士が1948年に書いた記事の内容に間違いのないことを確認し、確証を得たうえで、さらにそのことについて詳しく述べている捕虜やその他の人たちがいるということを考えてほしい。（それに、彼らの書いたもののなかにルッソの記事の内容と相反する事実はみあたらない。）

捕虜であったジョー・ダン（Joe Dunne）とエリック・クーパー（Eric Cooper）は江本のことを良く言っている。ダンは、江本が1943〔ママ〕年の３月に函館俘虜収容所長の任務を引き継いだとき[8]、誰もがみな彼の完璧な英語と彼が捕虜たちの福利厚生に関心を抱いており、しかもそれが特定の利害によらぬ純粋な動機から発せられたものであることに深い感銘を受けたと述べている。彼は、前途に明るい未来がひらけていることを確信させ、人びとに自信と希望を抱かせる、そのようなタイプの教養があり、さまざまな土地をめぐって、赴任先でいろいろな経験を積んだ人であったように思われる。捕虜たちは各自が抱えている問題や懸念について判断を仰ぎ、検討してもらうため、江本中佐のもとへ連れて来られた。中佐は捕虜たちに要求事項をまとめたリストを作成するよう求めた。要求の多くは直ちに満たされた。新しい靴下、タオル、仕事着、男性用ティーカップ、それまで一日一銭であった日給の引き上げ、３週間に一度の休労日をあらため毎日曜日を休労日と定めること。以上がそのあらましである。その後、わずかだが食糧の増量が行われ、赤十字社からの救恤品の小包も適正に配付され、看守や作業監督者の捕虜に対する殴打も禁止された。上磯派遣所において彼はセメント工場から監督権を移管し、軍の管理下に置いた。

以上述べた記述のほとんどは1943年３月から５月にかけて行われた捕虜収容所の状態の改善について述べた私の父の記述の内容と一致する。

クーパーは江本中佐について、彼はすばらしい職業軍人であった、と言っている。さらに彼は、1945年８月に戦争が終わったとき、江本がトラック１台分の瓶詰のビールを配達してもらい、元捕虜たちに語りかけて、スピーチのなかで彼らがそのもとで生活することを余儀なくされた過酷な状態を詫び、諸君らがもし日本に来ることがあれば、我が家ではいつでも君たちを歓迎する、と述べたことに言及している。

さて、ここで再びルッソの記事を引用して述べるなら、被抑留者の江本に対する畏敬の念がいかに大きいものであるか、その思いのほどは、彼の身を案じて、元所長の身に何が起こったのか、彼のために自分たちに何かできることはないのか、このことを知りたくて、元捕虜だった人たちから連合国軍最高司令官宛に出された何百通もの手紙の文面からはっきり読み取ることができる。

ジャワで捕えられた捕虜による報告を集めて編集した『ジャワの捕虜』という書物のなかには江本に言及したものが３つある。ロバート・チャップマン（Robert Chapman）は、一組のゲートル[3]を騙し取る不正を働いたため捕まった、函館ドックで作業に従事していた２人の捕虜についての短い話を伝えている。江本所長が「あなたたち二人は友達同士ですか」と尋ね、彼ら二人がそうですと答えたとき、江本は「類は友を呼ぶ」（‘Birds of a flock feather together’.）[9]とはこのことですねとコメントした。チャップマンは二人の捕虜は殴打ではなく、完璧さを欠いた不正確な引用を楽しんだと述べている。この話のなかで、彼は江本中佐のことを「高い教育を受けた日本人で、最高の英語学者」であると述べている。

同書のなかで、ゲートルを詐取した捕虜のかたわれであるダニー・メーゲン（Danny Meaghan）は、函館ドックの工場内の同じ２階で働いていた、日本人女性作業員の命を自分がどのようにして助けたのか、そのときの様子について述べている。彼女はそこで重い木型を滑車装置に吊るして、下の階に降ろす作業をしていたが、あるとき木型を引き摺って開口部

まで運んだ拍子にバランスを崩してうつ伏せの状態で倒れ、床の開口部から危うく落ちそうになった。メーゲンは彼女に腕を回して、転落するのをなんとか防ぐことができたが、自らもバランスを崩してしまい、一方の手で滑車装置のロープに、もう一方の手で彼女にしがみつかなければならなかった。救出されるまでの間、二人は「蔓にぶら下がったターザンのような恰好で右に左に揺れ動いた。」彼は女性に腕を回して抱えたこの件で、咎められることになるのではないか、厄介なことになったと思ったが、何も言われなかった。

１週間後のある日、収容所に戻るとすぐ、日本陣営の本部の前に演壇が拵えてあり、イギリス人将校やコック、看護兵、それに捕虜収容所の職員や看守全員が勢揃いして並んでいることに気づいた。一同みな演壇に向って気をつけの姿勢で立っており、江本中佐が登壇した。そして、「204号！」と大きな声が発せられ、彼の番号が呼ばれた。メーゲンは公開の鞭打ち刑が行われることを予期して列から歩み出たが、驚いたことに、江本はスピーチを始め、次のように述べた。「囚われの身にある者が勇敢であることを身をもって示すのは困難である。しかし、ここにその勇敢さが一条の光のごとく輝く一人の勇者がいる。」彼は集まった人びとや職員、看守を相手にさらに話を続けた。スピーチを終えたとき、彼はメーゲンを演壇に手招きした。江本が敬礼し、これに応えて、彼も敬礼を返した。このやりとりの後、彼は表彰状と煙草100本、剃刀の刃１ダースを贈呈された。

最後に、『ジャワの捕虜』という題名のこの本は、「英国空軍ジャワニューズレター」第１巻第７号、1944年10月刊（the *RAF Java Newsletter Vol.1 No.7, Oct 1944*）から次のような引用を行っている。「捕虜収容所の状態はそれを治める日本人の所長の人格に負うところ大である。もし善良な人物であれば、自らの管理下にある捕虜を助け、彼らの力になってくれるであろう。しかし、典型的な軍人タイプの人物の場合は、捕虜に対して厳しく、状況はより寛容でなくなるであろう。函館からの最近の報告は、当地の日本人の所長のことを、「活気のある、東京にある大学（the Tokyo university）の元英語教師で、自らの管理する捕虜収容所を日本一の収容所に改善することに全力をあげている」と述べている。

江本所長に関するさまざまな記述にはいくつかの点で齟齬がある。たとえば、彼は1944年に所長を引き継いだと言う人もあれば、これに対してそれは1943年であった、と言う人もある。彼の階級についても同様で、あるときは中佐であるとされ、また他の場合は、大佐であると言われる、といった具合である。おそらく彼はこの間に昇進したのであろう。最後に、ルッソは遺憾ながら、彼に対する苦情もまた彼の上官のもとに寄せられており、彼は捕虜にあまく、連合国びいきであり、「日本にとって有害な仕方でサムライに関する規範（samurai code）[4]について捻じ曲げて解釈している」という理由で非難された、と述べている。

江本は左遷され、二度と外国人と接することができない任務に配属されたが、ルッソは江本が発ってから２、３週間もしないうちに函館が日本のなかでも最も無慈悲な、非道が罷り通る捕虜収容所のひとつであるというもとの評判に戻ってしまったことを、確認している。とはいえ、捕虜との接触を断つことを目的に行われた彼の左遷と転属は、完全に成功したとは言えないように思える。エリック・クーパーは、ビールの配達のことや、江本が終戦ならびに1945年の８月中ごろに起こった出来事の顛末について人びとに知らしめるために行ったスピーチについて詳しく語っている。クーパーは彼のことを自分たちの「元収容所長」（“ex-Camp Commandant”）と確かに呼んでいる。「元収容所長」というこの言葉は―戦争の終結により―もはや捕虜でなくなった人たちが江本について語るときの言葉であり、あるいは左遷によりすでにその地位を退いた江本自身のかつての身分を指す言葉である。彼をめぐる階級や日付について些細な齟齬があるとはいえ、江本は「捕虜収容所長の模範」であると言ってもまったく差し支えないということは広く一般に認められ、共有された認識となっている。

1946年11月３日発行のワシントンの日刊新聞『星条旗新聞』（*Stars and Stripes*）は次のように報じている。「畠山の後任の、当時中佐であった江本茂夫は、彼と接触するようになった多くの元捕虜たちから選りすぐりの人物として賞賛され続けている。連合国軍最高司令官法務局にファイルして保管された宣誓供述書は、江本の就任こそは『われわれの生活に光明をもたらすもの』であり、日本人の捕虜収容所員のなかでも『彼が指針とな

る傑出した人物として闇を照らす灯台のごとく屹立していた』ことを証言している。」

14ヶ月という短い期間ではあったが、函館俘虜収容所長を務めた江本は、その後、労働部隊として日本に連れて来られた朝鮮の人びとを監督する日本軍の北海道セクションに転属となり、戦争終結までこの地位にあった。終戦のとき、江本は巣鴨プリズンに拘留されたが、戦犯容疑が晴れて裁判にかけられることなく、無罪放免となった。後に、彼は第一復員局の通訳翻訳官に任用されている。1966年、彼は78歳〔ママ〕の生涯を閉じた。[10]

本稿を終える前に最後に一言述べておきたいことがある。それは江本茂夫中佐を捕虜収容所長の模範とみなす見解が正しいものであり、―あらゆる証拠がこのことを支持しているとしても―、このことは、函館俘虜収容所での生活が耐え難いものではなく、楽であったことを意味するものであると受け取ってはならない、ということである。実際はそれどころではなかった。仕事がつらく危険な奴隷労働であったばかりでなく、私たちは捕虜の記述から、看守が抑留中ずっと組織的な虐待を行い、冷酷であったことを知っている。

別の言い方をすれば、江本は誰も耳を傾けない孤独な声だった。確かに彼の考え方や教えは、配下の者たちにかなりの影響を与えたし、少なくと

函館俘虜収容所本所跡地におけるテレビ局取材風景。写真中央がナイジェル・ブラウン氏（1997年７月14日）　※ナイジェル・ブラウン氏提供

も部分的には守られた。その成果は人びとによって認められもした。とはいえ、「模範的な行い」は少しも広まらなかったし、理解もされなかった。このことについては、戦後設けられた函館の将校や兵士による戦争犯罪を審理するための軍事委員会（ミリタリー・コミッション）が、捕虜に対する非人道的な扱いが日常茶飯事に行われていたことを立証している。

出　典

Brown, Daniel Ralph, Far East Prisoner of War Diary（2013）.
私の父がこの日記をつけ始めるのはリヴァプールのドック（船渠）を後にする1941年の12月のことである。だが、このときはまだこの旅がどれほど長く紆余曲折に満ちたものになるのかについて父には知る由もなかった。この日記は、父の身の回りに起こった出来事についての個人的な記録であり、〔日本軍による〕身柄の拘束や地獄船のこと、失われた命の数々、抑留、虐待、そして生き延びる決意について記している。この日記については、ナイジェル・ブラウンによって「ダン・ブラウンの日記（1941-1945）」と題して、オンライン上で公開されている。
＜http://www.nigelbrown.me.uk/pow-fe.htm＞

Tachikawa, Kyoichi, The Treatment of Prisoners of War by the Imperial Japanese Army and Navy, Focusing on the Pacific War, Japan National Institute for Defense Studies Security Report, No.9（2008）.
〔『防衛研究所紀要』英語版掲載の論文。同紀要日本語版においても掲載。オリジナルの立川京一氏邦文論文については訳注〔５〕を参照〕
＜http://www.nids.go.jp/english/research/profile/senshi/03-tachikawa.html＞

Russo, Peter V., A Model Japanese〔「日本人の鑑」〕, Staff Correspondent in Japan of The Argus（Melbourne, Victoria）, Friday 15th October 1948.
＜http://trove.nla.gov.au/newspaper/article/22688769＞

Java FEPOW 1942 Club（compiled）, Prisoners in Java, Accounts by Allied Prisoners of War in the Far East（1942-1945）, Hamwic Publishers 2007.
〔ジャワ極東捕虜1942クラブ編『ジャワの捕虜―極東における連合軍捕虜（1942-1945）による報告』〕
1984年から2005年にかけて『ジャワクラブジャーナル』に掲載された、ジャワで捕えられた捕虜自身による報告を集めたもの。同書に収められた記事は、３年半に及ぶ抑留生活中に味わった恐怖や絶望、ときどき訪れるユーモラスで愉快なひとときについて具体的に述べている。

Cooper, Eric, Tomorrow You Die〔『明日をも知れぬ命』〕, published by E. S. Cooper & Sons, Huddersfield, March 1995.
〔この表題は、抑留中、病床にあったときに日本人医師から告げられた言葉、“Good morning Pig, tomorrow you die.” に由来する―ナイジェル・ブラウン氏開設のウェブサイトより〕
エリックは極東捕虜としての自らの体験を綴ったこの涙を誘う感動的な報告を第二次世界大戦終了50周年を記念して執筆した。彼は起きた出来事をありのままに描き、忘れてはならない歴史の一齣について記録している。落魄や逆境に打ち勝った勝利の物語で、彼は置かれた状況がどんなに厳しくても人間の精神はけっして打ち負かされることはないことを示している。

Dunne, J. B.（*“Joe”*）, J. B. Dunne…… A life well lived.〔「J. B. ダン…… 満足に生きた人生」〕
この記録は彼の孫娘のステファニー（Stephanie）によってオンラインで公開されている。
＜http://www.jbdunne.co.za/index.html＞

POW Research Network Japan, POW Camps in Japan Proper by Toru Fukubayashi, research paper about Establishment of the Camps of the Allied POWs; Daily Life of the POWs; Liberation of the POWs and the War Crimes Trial; List of the POW Camps in Japan.
〔POW 研究会研究報告：福林徹「日本国内の捕虜収容所」。連合軍捕虜収容所の設置、捕虜の生活、捕虜の解放と戦犯裁判、全国の捕虜収容所一覧についての研究報告。同研究邦文報告掲載 URL：＜ http://www.powresearch.jp/jp/archive/camplist/＞〕
＜http://www.powresearch.jp/en/archive/camplist/index.html＞

Visit to Hakodate: 17 & 18 October, 2013.
2013年に行われた函館訪問の詳細な記録で、浅利政俊氏の要望により、同氏が組織する教育プロジェクトで活用するために伊吹由歌子がまとめたもの。第４回米捕虜と日本人の友好プログラムの一部。全記録はバイリンガルサイトの「捕虜日米の対話」（US-Japan Dialogue on POWs）に掲載。

＜http://www.us-japandialogueonpows.org/Hakodate%20Report.htm＞

※出典中に記載された〔　〕内の文や訳語や語句および＜　＞で括ったURLは、訳者が補足したものである。

原　注

（1）ピーター・V・ルッソ博士　ルッソは1948年に『アーガス』（ビクトリア州メルボルン）専属の日本特派員であった。

（2）連合国軍最高司令官（Supreme Commander for（or of）the Allied Powers）　第二次世界大戦後の日本占領期にダグラス・マッカーサー元帥（General Douglas MacArthur）が名乗った称号。連合国軍最高司令官の名称は数百人の米国の文官や軍人を擁する占領期のオフィスを指すこともあるので、このポジションは日本では一般に総司令部（GHQ）とも呼ばれている。

（3）ゲートル（puttees）ヒンディー語の patti に由来する名称。足首からひざにあたる脚の下の部分に螺旋状にきつく巻きつける包帯あるいは細長い布を指し、保護や補強のために用いられる。1890年代にイギリス領インドで兵役に就いた歩兵や騎馬歩兵が身に着ける軍服の一部として採用され、装着されるようになったのが始まりとされる。

（4）サムライに関する規範　8世紀の日本に登場した最初の侍（samurai）は文官だった。その後、12世紀になって武士階級（samurai-class）はこの国で天下を治める勢力になった。やがて、有力な武士の一門（samurai clans）は戦士貴族（warrior nobility）と化して、公家の娯楽を採り入れて、書や詩や音楽を嗜むようになった。19世紀末になると、武士階級は廃止され、国民的常備軍が設立された。「武士の道」（“the way of the warrior”）を説いた教えである武士道は、騎士道の概念にも通じ、知恵や平静さによって荒々しさをやわらげ、このことによって、荒事専一の殺伐とした武士（samurai）の生活を節度あるものたらしめている。武士道は質素倹約や忠義、武芸の熟達、名誉といったことを終生重んじるよう説いている。武士道の唱える教え（samurai teachings）は今日でも日常生活や現代日本の武道のなかに生きている。

訳　注

〔1〕江本中佐は歩兵中尉だったときに陸軍高等外国語試験（英語）に合格し、1918年4月から陸軍委託学生として東京外国語学校（現・東京外国語大学）に学び、翌年の3月に同校英語科を修了している。

〔2〕今回閲覧の機会を得たリチャード・C・スミス編の同書のリプリント（ラウトレッジ出版、2005年）には、パート1としてジョン・オーエン・ガントレット（John

Owen Gauntlett）の *Teaching English as a Foreign Language* というタイトルの著作（1957年）とパート２としてアルバート・シドニー・ホーンビー（Albert Sydney Hornby）の *The Teaching of Structural Words and Sentence Patterns, Stage I* というタイトルの著作（1965年）の２つが収録されている。ここに引用されているのは江本中佐の教授法に対してパート１の第２章 F. ORAL METHOD OR APPROACH のなかで表明されたガントレット氏による最大級の賛辞である。ちなみに、同氏は1935年に横浜専門学校に兼任講師として着任している。引用文では江本のことを元大佐と記しているけれども、実際の身分は中佐であったことに留意のこと。

〔３〕浜田平　1943年３月11日俘虜情報局長官。1944年11月22日タイ国駐屯軍参謀長。1945年３月１日陸軍中将。

〔４〕田村浩　1944年11月22日俘虜情報局長官。1945年４月30日陸軍中将。

〔５〕『防衛研究所紀要』第10巻第１号（2007年９月）所収の立川京一氏邦文論文該当箇所（同紀要115頁）より訳者転載。
＜http://www.nids.mod.go.jp/publication/kiyo/pdf/bulletin_j10_1_3.pdf ＞

〔６〕ガントレット同様、ルッソ博士もまた江本のことを元大佐と記している。

〔７〕江本中佐が熱心に唱道する武士道の教えは、捕虜に対する自らの身の処し方にも反映されている。彼は国際法に則って、敵国捕虜を名誉の捕虜として扱い、敬意を払うとともに、「武士は相身互い、相互理解」の武士道の精神に基づいてこの日本に古くから伝わる武士道の美徳をモットーに敵兵に対しても分け隔てなく公平に接したと言われる。このことが当時にあっては軋轢を生み、予期せぬ不興を買うことになるのだった。

〔８〕孫娘のステファニーによって公開されているジョー・ダンに関する現在のウェブサイトを閲覧すると、江本中佐の所長就任は1944年３月の出来事とされている。

〔９〕正しくは ‘Birds of a feather flock together’.

〔10〕江本中佐は1888年12月25日の生まれで、1966年１月29日に満77歳、数え年78歳でその生涯を終えている。